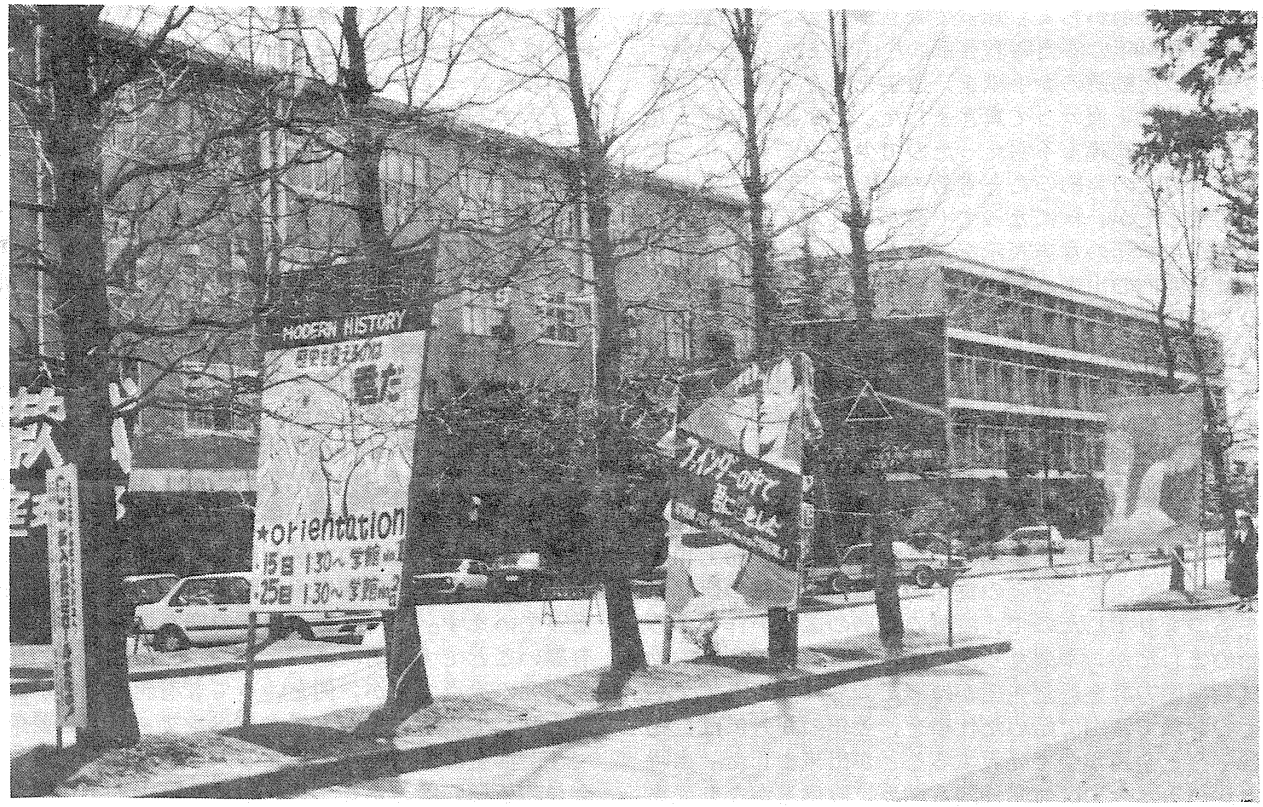
富山大学理学部同窓会

会報

第6号　　昭和61年6月1日発行



あいさつ

会長　平田卓郎

ハレーすい星も宇宙のかなたへ去り，76年後である2062年8月に再びもどって来るそうであるが，長寿の世界記録を次々と更新して長生きしないかぎり，もう見ることができない。

明治43年のハレーすい星は大へんすばらしかったらしい。富山でも，東方にそびえる立山連峰から，二つに分かれた尾を先に出し，真夜中の天空にまたがって来たとのことである。これは84歳の我が父の話である。今，生きている我々は，ハレーすい星とのめぐり合いの運わるく，肉眼では見ることができなかった。今後，生まれてくる後輩の皆さんは，次回のものを見ることができるわけである。次回は相当すばらしいということだが，その時代は，すでに宇宙基地や宇宙船に乗って近づいて観察することができるだろう。それを狙う宇宙技術の開発・国際交流はずいぶんめざましい進歩をとげているだろう。そこで，母校である富山大学では国際交流を積極的に推進するために，国際交流事業後援会が先日，組織されているので，同窓会員諸賢には母校のため，後輩のためにご理解とご支援をおくっていただきたいと思っている。

会員諸賢のご健祥を祈る。

富山大学の職員となって思うこと

佐藤清雄

私の里も家内の里もともに山形県の庄内地方ですので，前住地の名古屋から帰省する折，北陸線の通過駅として富山という地名は，印象にありましたし，又大学院と助手の時代に過した仙台には富山大学出身の方が何人かおられたので，富山大学には比較的身近かな感じを持っていました。特に片山先生，近堂先生，森先生や今は亡き畠先生は，東北大学金研の同窓生ですので，赴任前からよく知っておりました。そうはいっても昭和49年の春当時教養部の片山先生から思いもかけなかった勧誘のお手紙を，遊学先のアメリカで受取った時は，正直云って驚きました。研究設備の様子も，研究予算の規模も不明だったので少し不安もあり，又アメリカでの契約のこともあったので，即答は出来ませんでしたが，秋になって（確か10月末だったと思いますが）承諾の意志表示を送りました。富山大学側からは年度内の出来るだけ早い時期に着任して欲しいとのことでしたので，アメリカでの1年間の契約を10ケ月に短縮してもらい，富山大学に来たのが昭和50年の2月ですから，それからは，アッという間に過ぎた10年間でした。最初は教養部でしたので，現在の1号館に理学部と同居していました。当時の実験設備としては，磁界強度が20キロガウスの電磁石が1台あるだけで，それを理学部の斉藤先生と共同で利用しなければなりませんでした。富山大学に来てからは，希土類金属を含むニッケル合金の電気的・磁気的性質の研究をやるつもりでしたので，溶解のための電気炉作りから始めましたが，幸運だったのは，ナック電子製の振動試料型磁力計を近堂先生が持っておられたことです。そのお蔭で富山で始めた仕事を，翌年の3月には，物理学会と金属学会で発表することが出来ました。当時と比べると今では研究仲間も増え，設備もかなり充実しました。例へば固体物理関係で云うならば，前述の20キロガウス程度の電磁石が3台になりました。更に300キロガウスの強磁界発生装置も導入され，高感度磁力計も2台になりました。この様な拡充は，固体物理関係だけでなく，富山大学理学部全体の傾向でもある様です。

一方教育面から見ますと，教養部では理学部生，工学部生の区別なく学生に接することが出来たわけですが，両者の間にはなんとなく色の違いが感じられました。理学部の学生は一般に論理的解析を好む者が多い様で，新しい事象に積極的に取り組む様に思います。何かはじめての体験につき当った時でも，習っていないからと云ってすぐ投げ出さず，それを解決する手法を工夫する様に思います。試験の答案で比較的白紙が少ないのは，そのあらわれかも知れません。勿論中には独りよがりの珍答案もありますし，こんなことを苦労して書く位なら試験の前に少しでも勉強したらよさそうなものだと思われる答案もあります。ともあれ58年10月理学部に移って見て意外に思ったのは，専門に移行してから急速に学力の伸びる学生が少くないことです。理学部の中でも他の学科のことはあまりわかりませんが，物理学科でみると，学部生に対する企業からの勧誘が非常に多いのに，それを振り切って大学院に進学する学生が多いのは，その一つの証でしょう。ここで最後に会員の皆様にお願いがあります。ここ数年前からいろいろの企業が地方に進出して来る傾向が強まっており，地方の大学を出ても従来の地元企業ばかりでなく，大手企業にも就職することが出来る様になっています。これは富山大学の様な地方大学には，有難いことです。前に述べた設備の充実は，よい教育・研究の原点ですが，何をいっても有能な青年が数多く入学して来ることが大学のレベルアップの必要条件です。歴史にとらわれず地元の大学の良さを見直し，会員の皆様の優秀なご子栄を数多く富山大学理学部の方に入学させて下さいます様お願い申し上げます。

南極地域観測隊の当直

理学部　川田邦夫

小さなグループ活動や，共同生活を営む小社会にあっては“当番”とか“当直”という役目が順にまわってくることがある。全員で常時するのは不便であり，多くの人に対して絶対に必要かあるいはなされれば非常に快適でつごうのよい仕事を特定の人だけがするのでなく，順に交替でやる場合である。

1983年11月から1985年の3月まで1年4カ月もの間，小生は25次南極地域観測隊の越冬隊員として喰られた小さな社会の中で生活をしてきた。その中では当然，本来の観測研究の仕事以外に日常生活を円滑に行うため種々の役割が分担され，かつ“当直”なる仕事が周期的にめぐってきた。生活の場所や様子が違うと“当直”の内容も異る。こゝでは各々の異った生活環境の中での“当直”の内容と生活の一面を紹介しよう。

しらせ艦内

我々の25次隊から新しい観測船として砕氷艦「しら

せ」が就航した。これは海上自衛隊の所属だからこれを動かしているのは海上自衛隊員であり，200人程の人がいくつかの分隊に属していて各々の任務についている。彼らは我々観測隊員のような寄り集まりとは違い，しっかりした規律の下に行動している。同じ艦内に性格の異なる二つのグループが存在しているわけだが艦の中では艦内のルールに従わねばならない。しかし艦側も観測隊側の事情も理解していて，一種の“自治区”ができているのである。

そんな状態だから艦側とは別に観測隊内でも当直制があったが，艦の中では食事も清掃も艦側でやってくれるからほとんど当直の仕事はない。早朝と夜10時頃の2回，観測隊員が確実に居るかを確認して艦橋へ報告することと何か伝達事項があればこれを連絡する程度である。人数も多いから往路で一人が一回すればそれでよい。船の中では人が見当らないということは，海に落ちたことも考えられ重大事となる。当直の巡回する時間は室に居るのが礼儀だが居場所をあらかじめ伝えておいてもよい。朝は皆が起き出すと甲板等探すのがやっかいだからふつう寝ている頃を襲う。黙って隊員室に入り，ベッドのカーテンを開けて間違いなく本人が居ることを確認できることになっている。将来女性隊員が参加するようになったらどうなるのだろう。

みずほ基地

小生ら25次隊の雪氷研究観測部門の仲間4人と設営の機械と医療担当の2人が加わった6人は昭和基地から約260Kmも内陸にある標高2240mのみずほ基地にて約8か月の越冬生活を過した。

みずほ基地に到着してまもない頃は，越冬交替作業の忙しさに追いまわされ，南極の大自然を感じる時間もない程であった。先の24次隊が帰ってしまった後，気の抜けたような淋しさと静寂がやってきた。これ以後6人だけの生活が始まった。

こゝでは先の人々がやっていた方法を基本に25次隊に適した当直制がとられることになった。仲間が6人だから1日交替で6日に1度当直がまわってくる。当直の仕事はかなり忙しく，その日の他の仕事は免除される。通常8～9時，12～13時，17～18時の3度の食事の世話，つまり調理，配膳，片付けは当直の大きな仕事であり，他に，造水槽への雪補充，居住棟台所への水運び，汚水処理，居住棟掃除，調理用コンロへの灯油補充，小便所への熱湯流し等の仕事がある。またワッチと言って，9時，15時，21時，24時の4回，16KVA発電機エンジの点検と電力状況のチェックもせねばならない。仕事に慣れてきてからは15時の気象観測とこれを記号化して昭和基地へ送信する作業も当直の仕事にした。6月，7月の2か月間は雪氷部門の大課題である氷床の中層掘削作業が最盛期に入り，毎日，7時から23時まで2交替制の作業時間としたため，当直の内容も多少変化したが，基本的にはほとんど同じだった。

日頃台所に立ったことのない野郎達が料理の本を開き，慣れない手つきで包丁を使うのも世間の女性達にとってはおもしろい光景だったろう。みずほ基地の小人数での生活はまさに一つの家庭であり，当直は主婦とでもいうべき役割であった。それにしてもこゝでの主婦の仕事は忙しい。調理内容に手を抜けば自分の時間を持てるわけだが，当直日誌を見渡すと皆それなりに努力している。メインディシュが互いに重複してないこと，缶詰やインスタント食品の利用が少いことがこれを物語っていよう。食料は種々の物があり，雪洞の食料庫に自然冷凍されている。当直者は前夜に大体の献立を考えて材料を居住棟内に入れて解凍しておかないと調理に間に合わない。

最初の頃は当直がやってくるのが苦になっていたが，5～6巡した頃には，どうせやらねばならぬのなら前向きにやってやろうという気持ちになってきた。日本に帰っては再びこんな料理を作る機会はないだろう。他の仲間にもそんな傾向が幾分現われてきた。料理は経験の多少だけではなくて，食物に対する感覚が大きく影響していると思った。

単調な生活が必らずしものんびりしたものではなく，こゝみずほ基地での一日はかなり忙しかったが，変化にとぼしかった。単調さの原因は雪洞の中で6人だけという狭い生活環境にあると思われた。生活に変化をもたせるため，仲間の誕生会や作業の区切りなど，理由をつけてはパーティ料理(?)が作られた。いつもの内容よりは少し豊富で何か華やかな料理がテーブルを埋めた。ケーキがあり，鯛やぶりの姿造り，ローストビーフとワインなどが見られた。ロブスターや牛ヒレ，北京がもの丸焼き，あわびなどの材料も使われた。そんな日の当直者は気合を入れて頑張る。努力の結果は大体は喜んでもらえるものだ。こんなことがみずほ生活の中で一種の気分転換となっていたように思う。

当直の仕事の中で造水槽への雪入れとか発電機エンジンの点検，小便所への熱湯流しなどというのはみずほ基地での特色であろう。年平均気温が−35℃のみずほ基地で，もし発電機が故障して，明りも，暖房もとれなくなったら大変危険な状態となる。注意を払う理由である。まわりがいくら雪であっても，水にならないと何にも使えない。造水も重要な作業である。小便もどこでもするわけにいかないから場所を決めて朝顔が設けてある。この下には7～8mばかり直径10cm位の孔をあけてこゝへ流し込むことにした。ところがまわりがあまりにも寒いから小便程度の熱では孔を開けていくことができず，すぐにつまってしまう。そのため時々お湯を流して孔を拡げておくのである。台所の汚水もペール缶に貯めた上でこれをコンロにかけ暖めてから排水孔に捨てていた。

みずほ基地では当直の仕事以外に大便の処理（ビニール袋に入れていっぱいになったら捨てて交換する），や基地内への燃料の補給，基地内の狭くなった通路の拡幅などの協同作業がたくさんあった。

昭和基地

10月からの3か月にわたる内陸旅行の準備をするため，我々は8月下旬に昭和基地へ行き約1か月をこゝで過した。期間の短いこともあって昭和基地では客人的扱いを受けたが一度づつは昭和基地の当直もやった。こゝは人数が多く，仕事に従事する隊員も多岐にわたっているので，まさに小さな村落を形作っていた。調理担当隊員がいるから当直はこれを手伝うことと，食堂，風呂場，トイレ，廊下などの掃除くらいである。しかし範囲が広いから几帳面にやれば結構な仕事にはなる。人数が多いから巡ってくる間隔も長い。上記の当直の仕事とは別に昭和基地では，休日に調理担当者を休ませるため，3つの居住棟が交替で2～3人づつで食事を作っている。これも気分転換にはよさそうだが，おでんとか，カレーとか居住棟によってメニューが繰り返されるそうだ。大人数の場合，調理方法の点でも難しいのだろう。また各居住棟内にも当番があって暖房の灯油を入れたり，ションドラと呼ばれる小便を溜めておく200ℓドラムがいっぱいになったときの交換をしたりする。「所変れば品変る」で気軽にやれた。昭和基地はやはり大世帯で分業がしっかりしているから当直もあまり気にならない。

内陸調査旅行

夏が近づいているとはいえ，内陸へ向う旅行は最初の頃－40℃の寒さもあって厳しかった。SM 50と呼ばれる雪上車に二人づつがペアで乗り込み寝起きを共にする。4台の雪上車，16台の橇を引いた旅行隊は途中二つのパーティに別れたりしたので食料や設営道具も二つに分かれ面倒ではあった。4人のパーティのときは4日に一度当直がまわってくる。旅行隊の当直は主に食事の世話である。旅行中は行動に重点が置かれるから基地のようにどんな料理を作ろうかなどと考えておれない。食料はほとんどレーションとしてビニール袋に入り箱づめされており，順に開けて作るのである。したがって同じものが何度も出てくる。これではあきるだろうというので基地生活中に食べ残しの食物や，肉，魚，野菜等が別途の箱に入っていて，これらを適当にアレンジして調理する。大体はコンロに火をつけてお湯をわかし，食物を解凍したり，煮込んだり，油でいためれば済むようなものが多い。たまに魚などを焼こうとすると苦労する。一日の行動を終えてキャンプに入ると当直は居住カブースと呼ばれる食堂橇に行って食事の準備をし，他の者で雪上車への燃料補給，ラッシング等，雪上車や橇の点検をし，分担された観測事項を済ませるのである。当直は食べ終って皆が引き揚げた後の整理をし，翌朝と昼食の準備をして就寝する。朝は少し早く起き，朝食を作り，弁当とお湯入りのポットを用意して各雪上車へ渡す。昼食は各雪上車毎で食べるのである。

旅行も終りに近づくと，当直も大して苦にならず，ちょっとコンロ前の当直席に座るだけという位の気分になってくる。同じ食物の繰り返しに皆もあきらめているのだ。手の空いた者が，酒かビールを解凍してくれる。解凍したつまみでも食べていてくれる間に調理するというゆとりも出てきた。

家庭の主婦の仕事も大変なものだと認識した。しかしよくもまあ毎日あきずにやってくれているものと思うがこのようなゆとりのせいなのだろうか。ともかく世の男性諸子よ，改めて女房殿の忍耐強さに感謝しよう。えっ，自分は時々やっているって?! 偉い!!

◆理学部同窓会の現況（昭和61年4月1日現在）

○通常会員数	2,221名	○準会員数（在学生）	826名
文理学部理学科卒業者	1,778名	理学部	780名
60年度理学部卒業者	138名	大学院	46名
60年度大学院理学研究科修了者（学部外出身者のみ）	2名		

◆昭和61－62年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長　中川　正之（理学部長）
会　　長　平田　卓郎（1化）
副 会 長　石川　　克（1数）　高桑　昇（2生）
常任理事　吉川　和男（7物）　佐藤　卓（25生）　芦田　完（26化）　二宮　努（27数）
　　三宅　　均（29化）

◆事務局から

すでに30周年記念誌「雪紋」は大勢の方々から御購入頂きましたが，まだかなりの残部があります。御希望の方は同窓会事務局まで御連絡下さい。

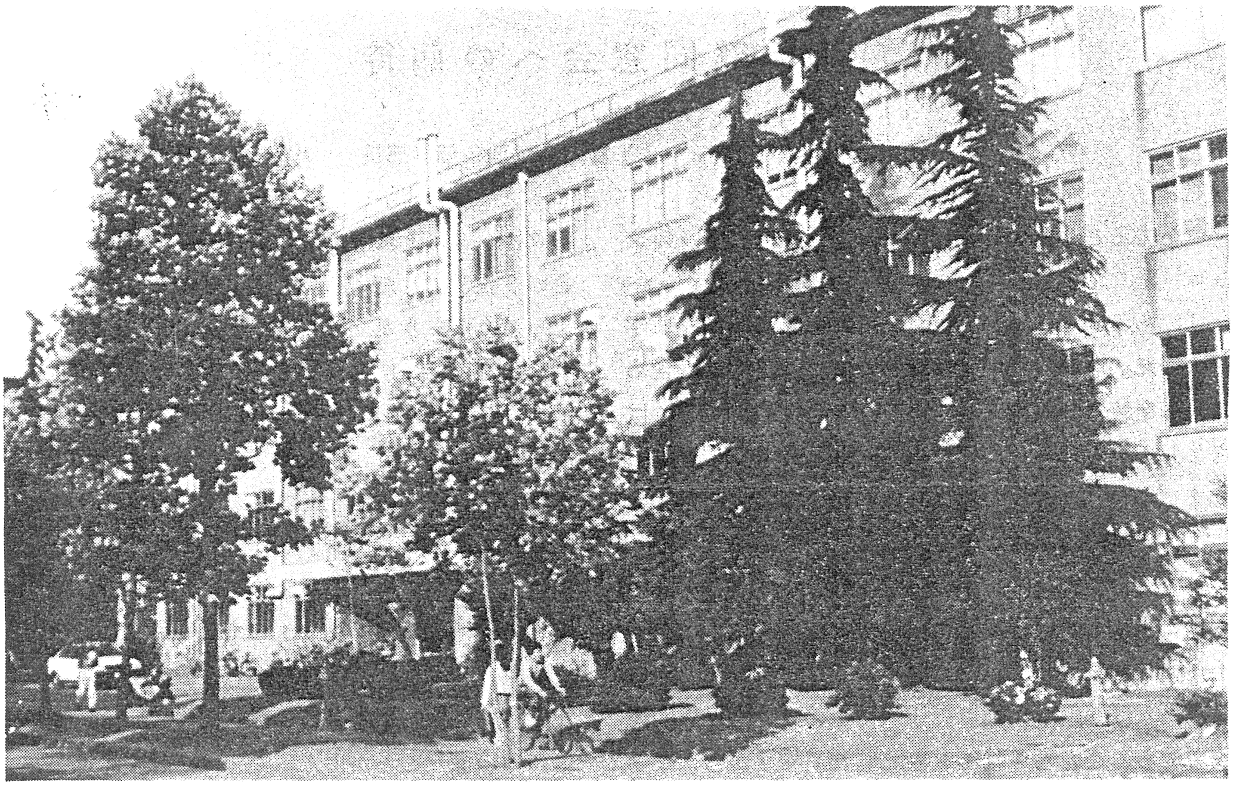
〒930　富山市五福3190　富山大学理学部同窓会　係　永川
TEL（0764）41－1271　内線291　郵便振替番号　金沢0－16829

発　行　富山大学理学部同窓会　〒930　富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL(0764)41－1271　内線291

富山大学理学部同窓会

会報

第7号　昭和62年6月20日発行



ご　あ　い　さ　つ
――〝ＳＦ〟から思う――

同窓会長　平田卓郎

２１世紀は，高度情報化社会であり，宇宙時代であるといわれる。

それには，豊かな創造性と国際性が根幹となるのは論をまたない。

昨６１年，富山県で開かれた国際会議に来られたうちの一人，ノーベル物理学賞のグラショー教授（ハーバード大学）は，高校生への講演の中で，『私は，若い頃からScience Fiction（科学空想小説）をよく読んだし，今もよく読んでいる。』と言われたことが印象深かった。ＳＦを読んでいるうちに，研究のヒントや切っ掛けが，文章の行間にたくさんひそんでいるようだ。それが新たな発明発見へと進でいくものらしい。

我が国も，繊維や鉄鋼の量産のあとは，自動車，テレビ，カメラなどの生産の時代となった。次は，これらを国際的にみて発展途上国にゆずるべきものであろう。そうしないと発展途上国は，立つ瀬がなくなる。

したがって，我が国もつねに発明発見を重ね，世界の最先端を次から次へと進むべきことになる。２１世紀中には，日の丸宇宙基地，宇宙船がとび交い，宇宙工場・宇宙農場，果ては宇宙市町村，宇宙学校などができ

るのも現実かもしれない。逆に，微小な世界では電子の中は何か，それより小さいものは何か。その次は何か。クオークの次は何か。その次は何かという果てしなく発明発見することが肝要となってくる。生命現象も純有機化学反応となるかもしれない。ここで，崇高な理念が光らなければならない。人類の幸福，世界平和，人間中心の全人教育の追究に照らさなければならない。

豊かな創造性と国際性を高めるために，時に頭を休め，ＳＦを読みながらあらゆる分野で，冷静につねに次に来るものは何か何かと追究していきたいものである。

なお，母校理学部の発展と同窓会員諸賢のみなさんの御健勝を願ってやまない。

理学部同窓会への期待

富山大学理学部学部長　小　黒　千　足

今を去ること約２５年前私は，ポストドクトラルフェローとして米国ニューオルリーンズ(New Orleans)にあるチュレーン（Tulane）大学に２年間留学しました。北海道に生まれ育った私は津軽海峡も含めて，海を渡るのが２度目という田舎者でした。それはさておきチュレーン大学は日本ではあまり有名ではありませんが，米国内では知らぬ人がいない大学で，全体的に活気にあふれておりました。医学部には後にノーベル賞を受賞した方がおられました。私が席をおいた動物学科には紀要（Tulane Studies in Zoology)がありましたが，複数のレフェリーをおき，その内の一人は外国（米国以外）人でその分野の世界的権威者であることとされておりました。ですから，なみの紀要ではなく，大変レベルの高いものでした。これらは大学に活気があったという例であります。

さて，ある日，大学の周囲にある立派な家々に美しい飾り，花輪あるいは看板（？）が掲げられ，まるでお祭りのような感じになりました。私は何が始まったのか解りませんので友人に尋ねましたら，来週からHomecoming Days が始まるのでAlumni Houseに飾りをしているとのことでした。そこでまた，それらは？と聞きました処，前者はこの大学の出身者が大学に戻ってきて，会合に参加し，旧交を温め，旧師に会い或は在校生と親交を結ぶ催しであるとのことでした。また後者は，同窓生会館のようなもので，学部（College），クラブ，あるいは成績によって作られるグループがそれぞれ持っている家（House）であるという説明でした。私はこれらは個人の豪邸であると思っていたような立派な家でした。

次の週は本当にお祭りの日々でした。夕方までは講演会，音楽会，ゼミナール等が目白押しにあり，それから後はパーティ，仮装大会などがあり，あるHouseはダイニングルームを開放して誰でも立ち寄って一杯飲めるようになっておりました。また，オープンカーに鈴成りに乗ってビールを飲みながらパレードをするなど，一寸危いのもありました。

当時，私はなんとばかばかしいお祭騒ぎだろと思わない訳でもありませんでしたが，年を経るに従って次第にその様なことが出来るのを羨ましく思うようになりました。学部あるいはサークルがそれぞれ立派なHouseを持ち，年に一度多くの出身者がそこに集まってくる。勿論，在校生もそこに加わって人間的な縦のつながりが出来ることは素晴らしいことに思えます。例外はありましょうが，日本では一旦社会に出てしまいますと，ビジネス上の或は管理社会的な縦のつながりは出来ても，年代の離れた先輩後輩の大学を通じての交流は難しいような気がします。

同窓会には，出身者が戻ってきて喜んで参加する，そして在校生も将来は自分も是非そうしたいと思えるような何かがあっても良いのではないでしょうか。

「ゴマの来た道」を書いて

小林貞作

岩波新書の拙著「ゴマの来た道」は，昨年１０月出版した。現在第３刷りに入っているので，全国的によく読まれているに違いない。

岩波書店編集部から，この本の出執依頼を受けたのは，約４年ほど前で，たしかアフリカへゴマ調査に出かける直前だったと思う。書くことを約束はしたものの，その後もゴマの調査，国際協力研究をして国際会議などで海外に出かけることが多く，正直なところ，なかなか腰を落付けて書く余裕はなかった。外国出張が多かったので，小林は富大の教授かなどと言われたほどであった。そんなことで，やっと１年半ほど前に書きはじめ，昨年１０月出版にこぎつけた次第である。

このゴマの本は，未熟な私の研究をベースにして，栽培ゴマの発祥のふる里を探索し，その起源地である東アフリカのサバンナ農耕文化地帯から，どのようにしてゴマが世界に広まったかを書いたものである。すなわち，その伝播経路である「ゴマの道」（セサミロード）は，どのように全世界へ広まったかという内容が骨子になっている。

そこで，ゴマという油脂植物がアフリカから漸東し，伝播の先ざきの国ぐにには それぞれ特有なゴマ食文化が生まれることになる。それは，食べ方，料理・調理法そして貯蔵法などいろいろあり，このなかに生活の智恵も活かされる。身近なことで言えば，ゴマやその油の味と香りを十分に活かした古来からの中国料理と日本料理（精進・テンプラ料理など），最近では，インスタントラーメンやマクドナルドハンバーガーまである。

古来，このような食文化が生まれると，その原料である植物（作物）の栽培管理や収穫調製などを重要視するようになる。その結果，豊作を祈るさまざまな祭りごとや各種行事がおこなわれるようになる。すなわち，イネとかムギとかあるいはこのゴマとかが出現したために，それに付随して文化らしいもの，そして文学的なロマンも生まれる。たとえばゴマでは，アラビアンナイト（千夜一夜物語）の〃開けゴマ〃であり，日本の「ゴマすり」「ゴマかす」「ゴマのはい」といった具合に。

「文化とは何ぞや」とよく言われるが，私にはわからない。しかし，上記のような，自然科学の研究で生み出した改良ゴマが，多用途の食文化を生み，さらに文学が加わってロマンまで発達するということは，これこそ大きな意味での「文化」に当るのではなかろうか。雪の研究で知られる中谷宇吉郎氏も，雪の物理学には結晶のロマンと夢があるといった。それは，雪国で生まれた衣食住のさまざまな文化があり，「北国の春」の歌謡曲にまでつづく。

世界の古代文明といわれるエジプト，メソポタミア，インダスそして黄河の各文明は，すべて農耕文化と食文化の上に栄えた。これらは，ローマ，ギリシヤ，アラビアなどの各文化に引き継がれ，文学・芸術などもちろん，われわれの関係する自然科学でもすぐれた学者が輩出し，学問が大いに発達した。これらはすべて，より進化した食文化が基礎になってのことであった。

私のような，自然科学の端くれをかじっているような者では，大それたことは言えないが，自然科学のどの分野の研究でも，それは必ず人文科学との接点をもち，文化への道につながるということである。そしてここで生まれた文化は，人類福祉に大きく役立つもの

と信じている。「ゴマの来た道」を書いて感じたこと　　とである。
は，自然科学は決して一人歩きはしていないというこ

◆理学部同窓会の現況（昭和６２年５月１日現在）

○ 通常会員数	2,３９５名	○ 準会員数（在学生）	８９７名
文理学部理学科卒業者	1,７７８名	理 学 部	８３９名
61年度理学部卒業者	１７４名	大 学 院	５８名
61年度大学院理学研究科修了者（学部外出身者のみ）	０名		

◆理学部同窓会特別会員の異動

○ 停年退職

S 62. 3. 31	児島　毅	電波物理学
S 62. 3. 31	小林　貞作	細胞生物学
S 62. 3. 31	中川　正之	雪　氷　学

○ 採　用

S 62. 4. 1	山田　恭司	細胞生物学助教授
S 62. 4. 1	大藤　茂	地殻進化学助手
S 62. 4. 2	赤羽　賢司	電波物理学教授

○ 転　出

S 61. 8. 1	竹内　章	地殻進化学助手	富山大学教養部へ
S 61. 9. 30	中川　邦明	電波物理学助手	城西大学へ

◆昭和６１－６２年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長　小黒　千足（理学部長）
会　　長　平田　卓郎（１化）
副 会 長　石川　　克（１数）　高桑　　昇（２生）
常任理事　吉川　和男（７物）　佐藤　　卓（25生）　芦田　　完（26化）　二宮　　努（27数）
　　三宅　　均（29化）

◆事務局から

すでに30周年記念誌「雪紋」は大勢の方々から御購入頂きましたが，まだかなりの残部があります。
御希望の方は同窓会事務局まで御連絡下さい。

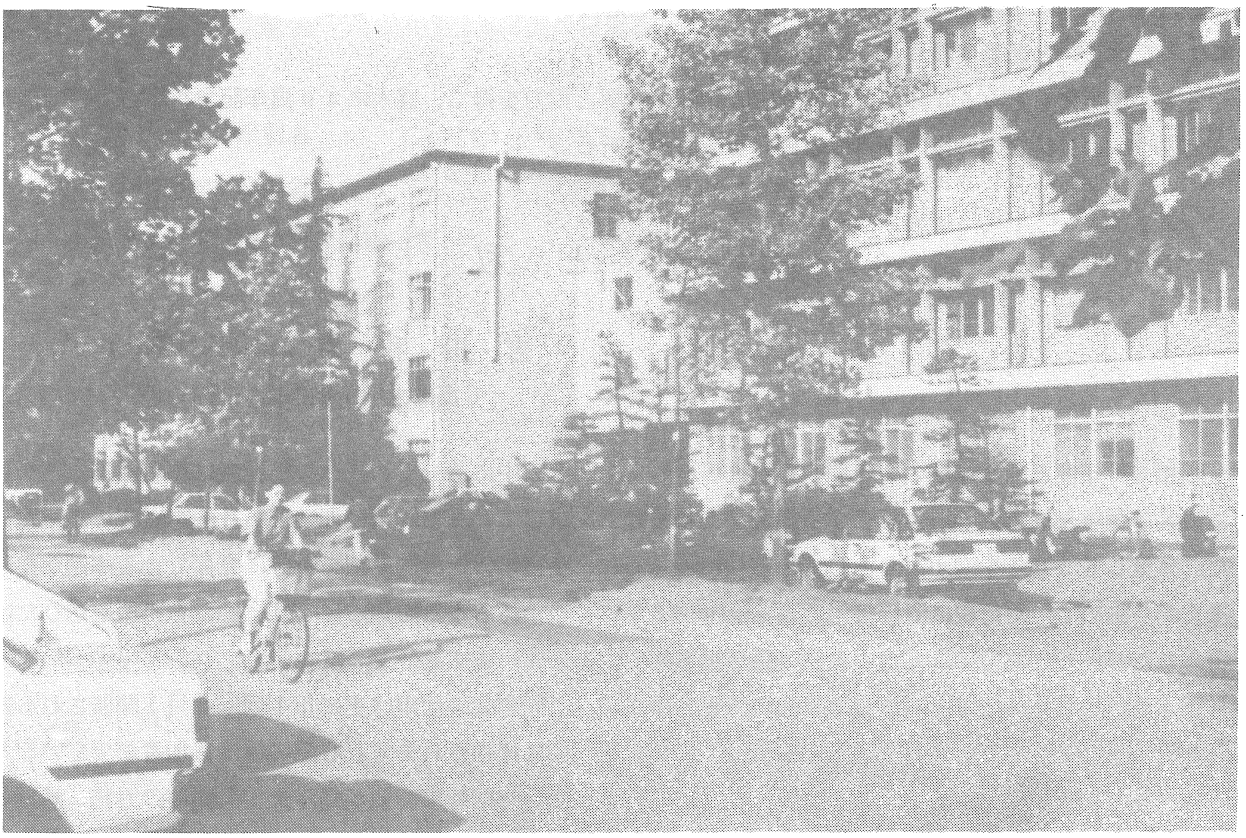
〒930　富山市五福3190　富山大学理学部同窓会　係　上口
TEL（0764）41－1271　内線291　郵便振替番号　金沢0－16829

発　行　　富山大学理学部同窓会　　〒930　富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL（0764）41－1271　内線291

富山大学理学部同窓会

会報

第8号　昭和63年 7 月10日発行



ごあいさつ

－35年間の日進月歩に思う－

同窓会会長　平田卓郎

今から35年前の昭和28年3月20日に「富山大学文理学部理学科同窓会」が発足した。それは，第1回卒業式の当日で，式のすぐ後であった。

恩師をはじめ，卒業生27名全員が集まって蓮町の旧校舎（現在の馬場記念公園）で発会式と第1回の総会が開かれた。ここに本年は35周年の記念すべき年でもある。

現在は，同窓会総員3,000人の多きに達し，それぞれの分野で活躍のことは，お互いに，喜びにたえないところである。これらについては，「雪紋」（30周年記念誌）に詳しく記録されている。

この３５年間の科学技術の日進月歩は各領域でめざましく，特に高度情報化社会となり，コンピュータ時代が到来した。３５年前では，私どもは，せいぜい計算尺を用い，もっぱらグラフは手書きであったが，現在は，コンピュータのお蔭で正確・迅速にその結果を得るようになった。このように次々と開発され，進歩し，人間の知能のしくみが分析され，再び統合されると，データーから自動学習・判断・推論を行うことのできるコンピュータが生まれくる。ここで私は常に人間の崇高な理念が光らなければならないと思う。何をおいても人類の幸福・世界平和・環境保全の追究に照合されなければならない。コンピュータを過信してはいけない。情報に埋もれてもいけない。

将来の３５年間では人工衛生が飛び，美しい月を眺め賞でるだけでなく，誰でも月世界へ行き，宇宙旅行ができ，宇宙基地に工場・農場・リゾートが作られると思う。外国にさきがけて開発し，宇宙語は日本語が主流になってほしいと若者に願うようになってきた。

さて，現実にもどり５年後には，同窓生の諸賢の理解と協力を得て，盛大に４０周年記念行事を実行できたらと思う。会員諸賢の今後の御自愛と御発展を心から祈る。

母　校　と　私

吉　川　和　男（第７回物理卒）
（富山大学工学部助教授）

昭和６１年度と６２年度の２年間，常務理事として富山大学理学部同窓会のお世話をする機会がありました。卒業して３０年を迎えようとしている私にとって，遠くから眺めていた母校に直接接触できるチャンスが得られたわけで，お役に立ちたいという意気にもえてお引き受けしたものです。古き良き時代の感慨の中から現代の理学部をみる私の人生にとって幸なことであったと思います。

私は昭和３４年文理学部理学科物理の中川研の卒業で丸々の“蓮町っ子”です。卒業後富山大学工学部に奉職し，現在にいたっています。偉大な恩師中川正之先生は当時３０代の働きざかりで，問題解決への考え方，実験の進め方等，親身な指導を受け，私の研究者としての心構えを育てていただきました。その中川先生も退官され，いまさらながら時の流れを感ずる此頃です。現在の理学部は偉大な先生方のご薫陶を得た若いホープ達が学生諸君を指導していらっしゃいます。私達の学生時代と比較して，現代は満ち足りた時代であると共に多様化と変革の著しい時代でもあります。その中にあって，先進技術社会は革新と創造性を要求しています。母校理学部も社会ニーズにあった先端科学の指導的役割を十分に発揮できる体制が整いつつあることを知るにつけ，心から声援を送りたいと思います。

同窓会の仕事は主に年１回（８月）開催される総会に集約されます。心配の種は参加者が少ないことで，毎回幹事の頭が痛みます。開催の方法，時期等役員一同で，検討はするが，名案がでないのが現状です。

昔の１００年と今の１年というものが全然違う。この１０年間の世の中の動き，社会にしても随分変わってきている。今からの１年間，これからの３年間というものが昔の１０年，２０年の流れに凝縮したように早い，私達はその中を流されている。昔に比べてゆとりの時間が減少し，心のゆとりもなくなっている。

母校は私達の心の故郷である。

恩師と語り，古き友人と語り，杯を重ねれば私達

の心も若き日に遊び，温かいゆとりが生まれると思います。６２年度の総会で同級生の石倉氏（熊本大理学部教授・生7）を講演者としてご来県いただいたのを機会に，私は７期の同窓生にも連絡して，さゝやかな同級会も同時に開催いたしました。卒業して初めての同級会でもあり，２次会では時間を忘れて語りあい，深い感銘と共に，またの再会を約束したものである。

社会でも伸びる人，伸びない人がいますがその置かれた環境にてこ入れすることで伸びない人を伸ばすのが企業です。理学部同窓会はいま伸びない人に相当します。同窓生の皆様には同窓会の益々の発展の為絶大なるご協力を賜わりますよう元役員としてお願いいたします。

◆理学部同窓会の現況　（昭和６３年５月１日現在）

○通常会員数	2,５３９名	○準会員数（在学生）	９３８名
文理学部理学科卒業者	1,７７８名	理 学 部	８７３名
６２年度理学部卒業者	１４０名	大 学 院	６５名
６２年度大学院理学研究科修了者（学部外出身者のみ）	４名		

◆理学部同窓会特別会員の異動

○停年退職

S 63. 3. 31	久 保 和 美	生 理 学
S 63. 3. 31	田 中 専一郎	応用解析学
S 63. 3. 31	関 口 健	数理統計学
S 63. 3. 31	高 崎 公 文	事務長補佐

○採　用

S 62. 10. 1	松 島 房 和	レーザー物理学助教授
S 62. 10. 1	岩 坪 美 兼	生物文部技官
S 62. 11. 1	庄 子 仁	雪永学　助教授
S 62. 11. 1	大 石 雅 壽	電波物理学助手
S 63. 4. 1	藤 田 安 啓	数理統計学　講師
S 63. 4. 1	田 村 典 明	生 理 学　助手
S 63. 4. 1	菊 地 万 理	数理統計学　助手
S 63. 4. 1	吉 田 範 夫	応用解析学　教授
S 63. 4. 1	池 田 榮 雄	応用解析学　助手

○転　出

S 63. 4. 1	中 村 良 郎	代数学教授	→	埼玉大学教育学部へ
S 63. 3. 31	林　　有 一	応用解析学	→	金沢女子短大へ
S 63. 3. 31	吉 田 喜 孝	固体物理学	→	いわき明星大学へ
S 63. 3. 31	松 原　　勇	構造化学	→	金沢経済大学へ

◆昭和６３－６４年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長　小黒　千足（理学部長）

会　　長　平田　卓郎（１化）

副 会 長　石川　　克（１数）　高桑　　昇（２生）

常任理事　阿部　幸隆（２院数）　近堂　和郎（７物）　森田　裕之（１４化）

岩坪　美兼（２６生）　笠原　一生（２７化）

◆事務局から

新名簿の発行（昭和６４年２月）を予定しておりますので，広告掲載と名簿購入の件同封したハガキを同窓事務局へ８月１０日までに返送して下さい。

〒 930　富山市五福３１９０　　富山大学理学部同窓会　係　上口

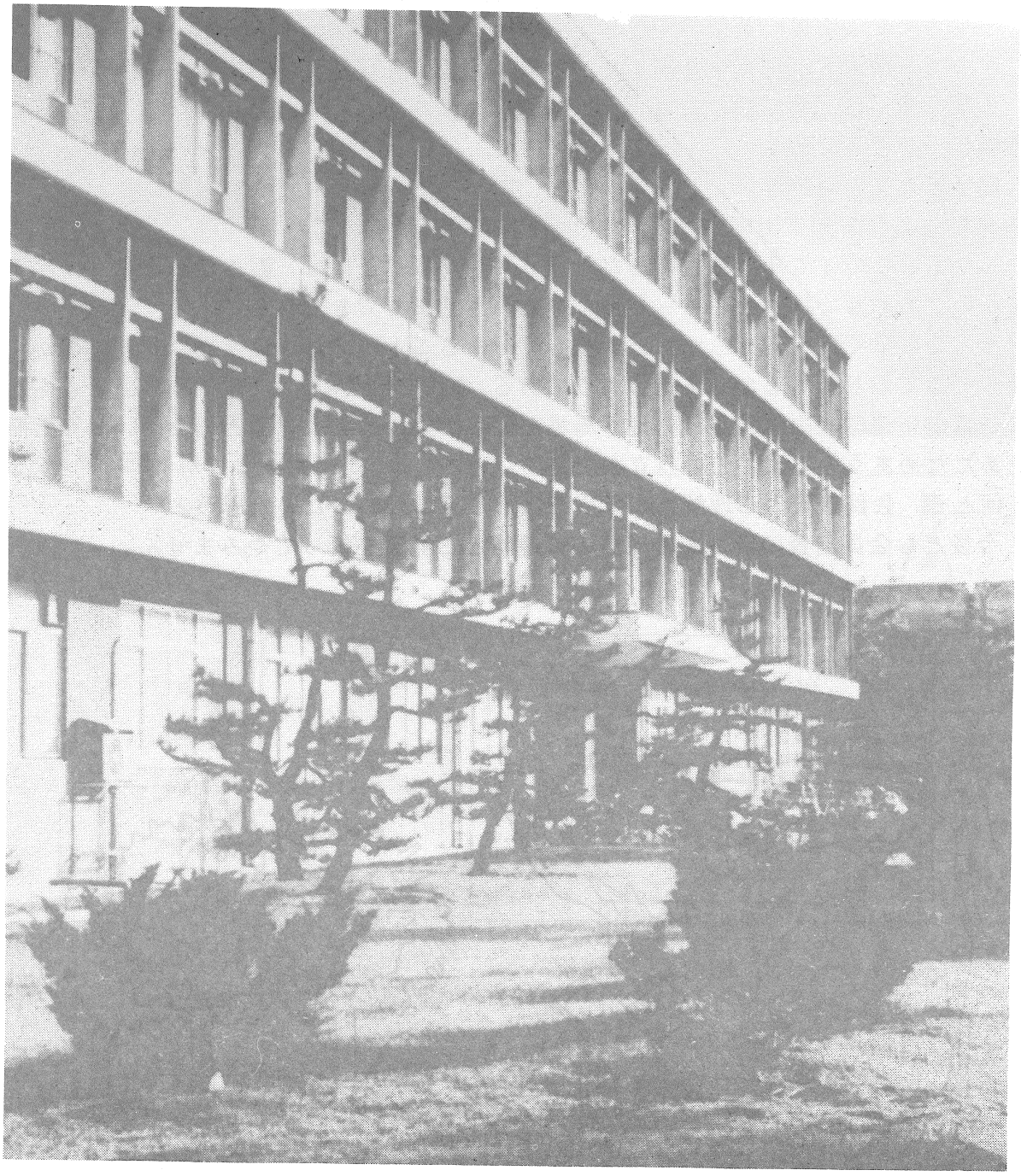
TEL（0764）41－1271 内線２２９１　郵便振替番号　金沢　0−16829

発　　行　富山大学理学部同窓会　〒930　富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL（0764）41−1271 内線2291

富山大学理学部同窓会

会報

第9号　平成元年7月25日発行



ご　あ　い　さ　つ

“すばらしい記念石彫を！”

同窓会長　平　田　卓　郎

いま，「地平天成，内平外成」といい，国の内外にも，天地にも平和が成ることの願いをこめて，年号も新しくなり，その平成元年も半ばを過ぎた。

思えば，今年は，富山大学が，昭和２４年（１９４９年）に創立されてから，ちょうど４０周年を迎えている記念すべき年でもある。

そこで，富山大学創立４０周年記念事業として，文理学部跡地に，すばらしいデザインの記念すべき石彫を設けては，どうかという話がもち上がっているのも，意義があり，喜ばしいかぎりである。

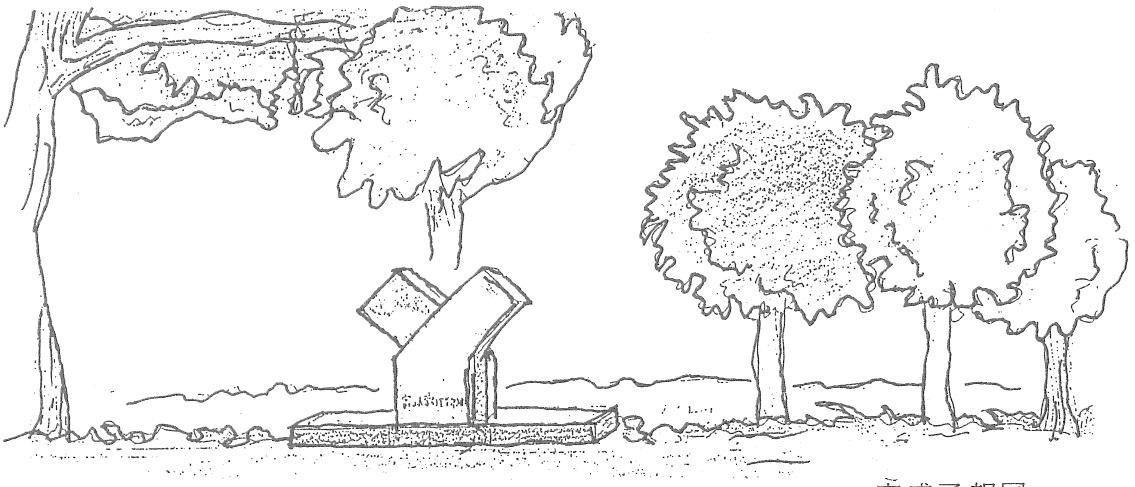
理学と人文の両学部が，お互いに未来に向かって，限りなく飛翔していくという希望にみちたようなデザインがよいというわけである。

しかも，この４０年の節目にあたり，９月下旬の休日には，賑やかに被露式か除幕式を行い，あわせて祝賀会をもったらよいという話までできている。

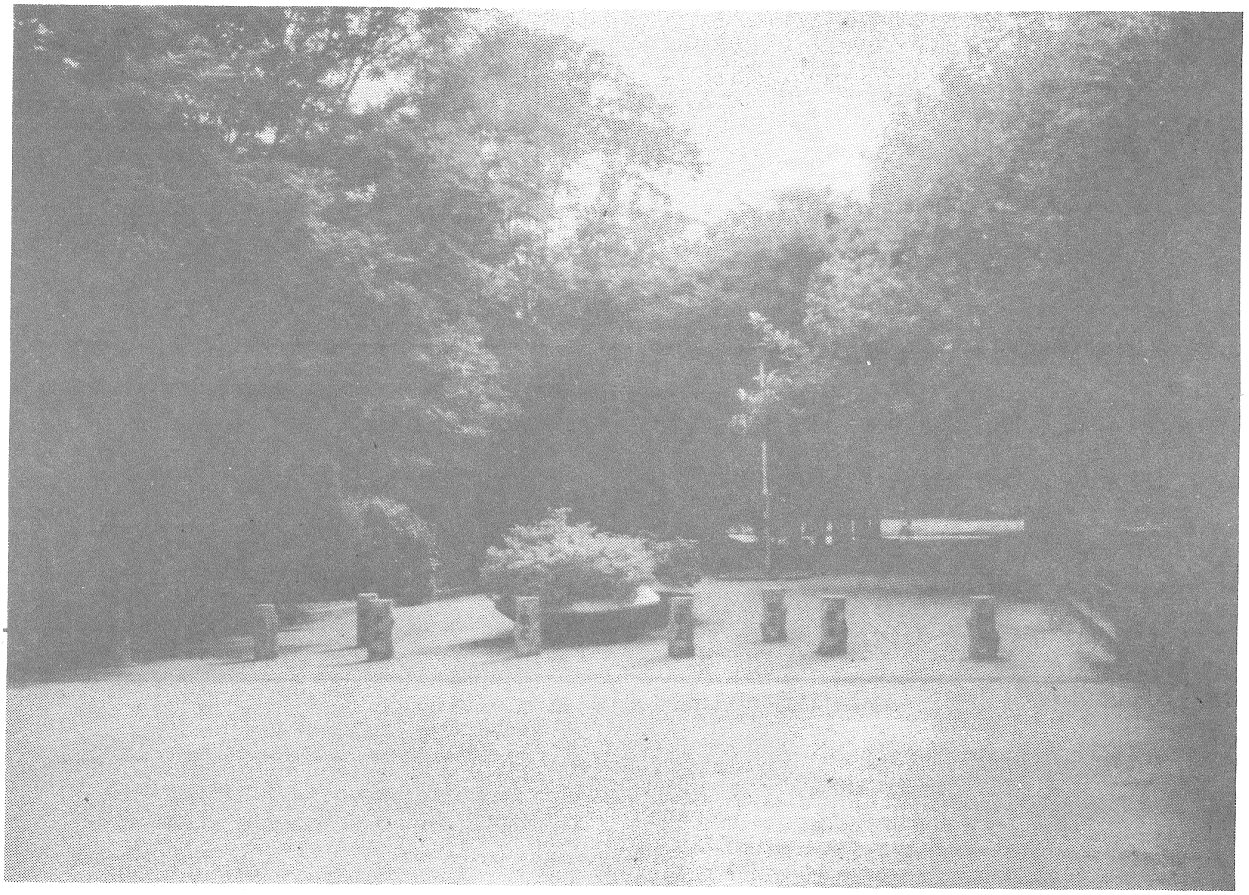
そんなに早く完成できるかなという心配もあることはある。理学部は文理学部から発展してきており，同窓会もまたしかりである。これを機会に，人文学部同窓会とともどもに，富山市蓮町の両学部発祥の地（馬場公園）に集いして，恩師と語らい，旧知と旧交をあたためあうのもよいという立案である。

何とぞ，会員諸賢のご理解とご承引をよろしくお願いしたいと思う。

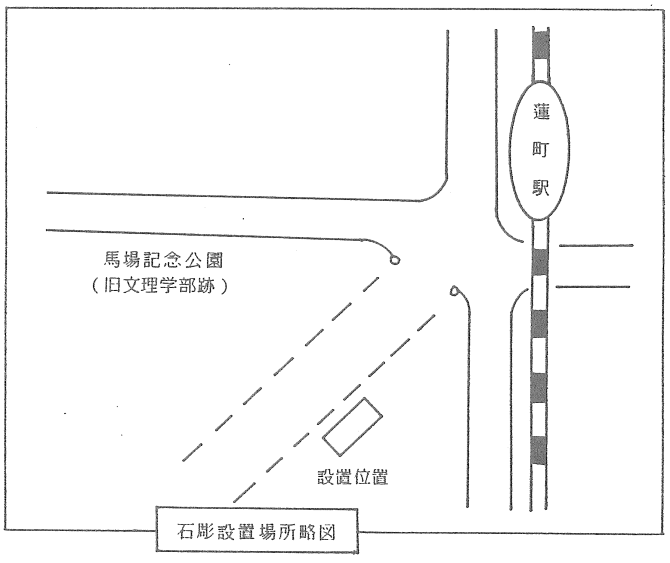
今後とも会員諸賢の皆さんの一層のご健勝とご発展を祈ってやみません。



完成予想図



馬場公園入口（通用門）



石彫設置場所略図

◆ 理学部同窓会の現況　（１９８９年５月１日現在）

○通常会員数	3,139名	○準会員数（在学生）	952名
文理学部理学科卒業者	1,780名	理　学　部	880名
63年度理学部卒業者	172名	大　学　院	72名
63年度大学院理学研究科修了者	6名		
（学部外出身者のみ）			

◆ 理学部同窓会特別会員の異動

○辞職	H元3.31	池田泰子	数学科文部技官
○採用	S63.11.1	西村克彦	固体物理学助手
	H元4.1	古田高士	応用解析学及び電子計算機論助手
	H元4.1	澤田佳子	数学科文部技官

◆ 平成元年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長　小黒千足（理学部長）

会　　長　平田卓郎（1化）

副会長　石川　克（1数）　高桑　昇（2生）

常任理事　阿部幸隆（2院数）近堂和郎（7物）　森田裕之（14化）

岩坪美兼（26生）笠原一世（27化）

◆ 事務局から

１９８９年作成の会員名簿を購入された方で，まだ名簿代金未払いの方は早急に納入して下さるよう，よろしくお願い申し上げます。

（郵便振替番号　金沢０－１６８２９）

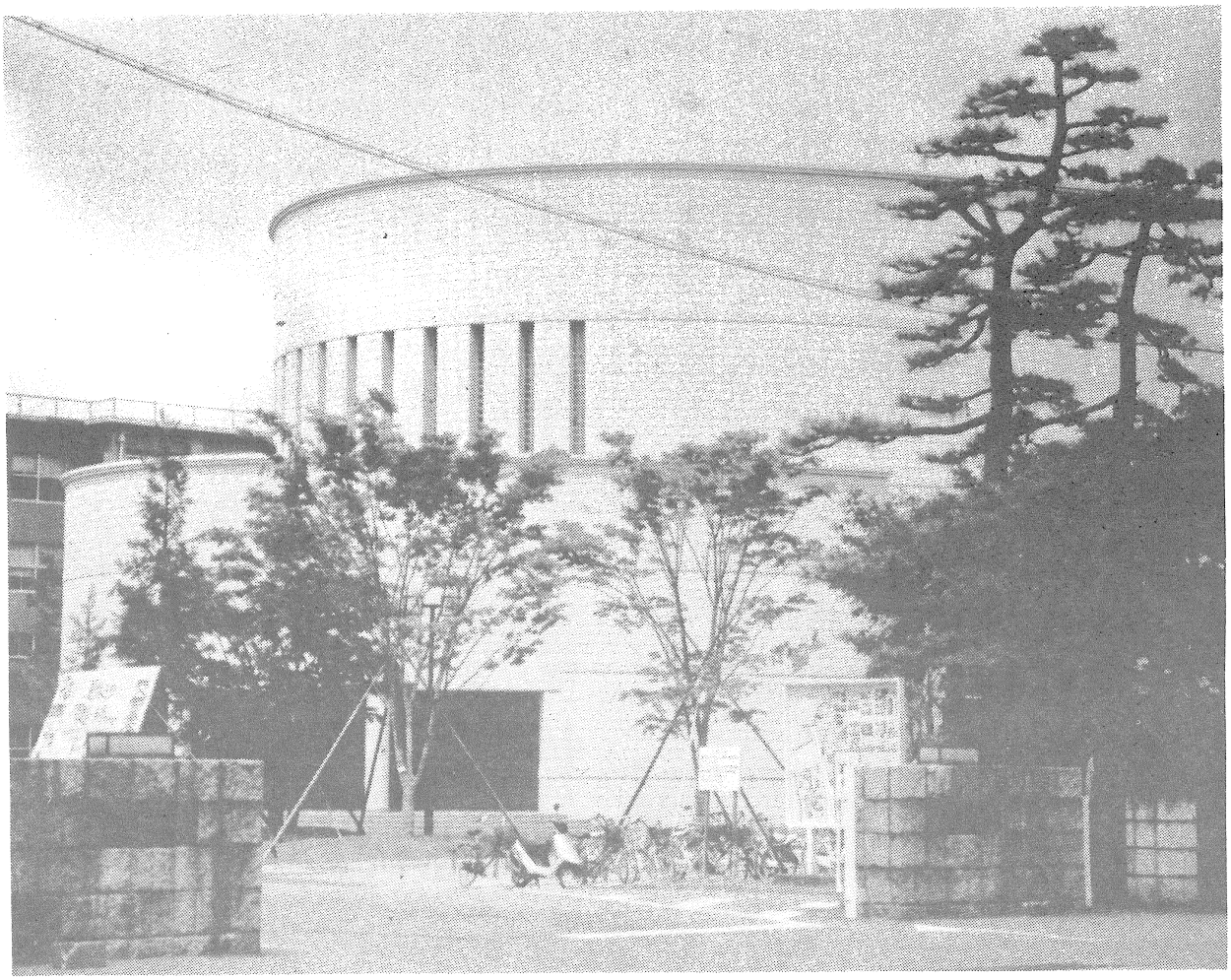
〒930　富山市五福３１９０　　富山大学理学部同窓会

発　行　富山大学理学部同窓会　〒930　富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL（0764）41−1271内線2291

富山大学理学部同窓会

会報

第10号　平成 2 年 9 月 25 日発行



－新装なった黒田講堂－

ごあいさつ

「ガンマとシグマ」

会長　平田卓郎

理学部の前身でもある文理学部の学舎の跡地に、富山大学創立４０周年記念事業として、ちょうど１年前の平成元年９月２３日の「秋分の日」に、文理学部跡の石彫が、設置された。

その場所は、富山市蓮町の現在は馬場公園とよばれ、その入り口で盛大な除幕式および記念式典が、厳かに開催されたのは、ご存知のとおりであり、よろこばしいかぎりである。

このとき、ご出席された元文理学部長の竹内豊三郎先生が、ごあいさつの中で、この石彫は、第一印象として、ガンマγ線を思い出すと言われ、放射線のうちで、ガンマ線は、最も強い透過力をもち、エネルギーも最も大きいと話されたことは、理系の私どもには全く、〃同感〃のいたりである。

未来に向かって、力強く、発展していくことを表徴している。

ところで、はじめは記念碑という案であったが、それよりも、記念石彫のほうが、一層ふさわしいということになり、総和の意味をもつ記号シグマΣから、デザインが展開され、起ち上がったものであるというのが設計者のイメージである。それによれば理学部と人文学部の両学部が、お互いに寄り添いながら、総和強調して進んできていたのから、将来に向けて、それぞれ、改組分離して、天高く、飛翔していく姿を描いたものであるという希望に満ちた表徴である。

ガンマ線のごとく、シグマのごとく、この記念すべき石彫は、理学部と人文学部の両同窓会員の諸賢の発展をも願っていることは、まことに、有意義なことである。

同窓会諸賢の今後のご健勝を、心から祈ってやまない。

退官にあたって

横山　泰

光陰矢の如く早くも定年を迎え、苦い思いは忘れ去り楽しい思い出のみ残ります。その初めは強い憧れと飛び級で北大に入ったことで、今はこの種の憧れも少く飛び級制度もなく時代を感じます。次は輝かしい研究の数々に魅せられて飛び込んだ阪大での生活で、勤務先は産業科学研究所と云い関西財界の寄附でできたものですが、やっていることは有機化学反応機構の研究という極めて基礎的なものでした。俊英集い仕事中心の張りのある忘れ得ぬ十数年でした。次は富大に赴任して間もなくの米留学です。かの国は能率本位、機械文明の乾いた国と聞いていたのに聞くと見るでは違い、広大な国土に恵まれたゆったりした（少くとも当時は）国、人づき合いの良さに個人主義故か他人の生活に無用に干渉しない面もあって自由で仕事のし易い快適な生活でしたし、また給与がよくて有給休暇の一ケ月を欧州旅行に当てることが出来ました。それも米人の中の唯一人の日本人のグループ旅行でしたので、欧米両域の文化や市民感覚の差の一端を感じとることもできて忘れ得ぬ楽しい旅でした。最後は定年迄の十五年に汎る米海軍のＤｒ．Ｋａｍｌｅｔ、カリフォルニア大のＰｒｏｆ．Ｔａｆｔとの共同の仕事です。これは高速道に入ったら隣りを走っていたという様な偶然の出会いでしたが、これも討論をしかけるという合図を送らなかったなら気付かずに過ぎていたかも知れません。なにせ速度無制限の高速道でナヴィゲーターも交替ドライヴァーもいる米、英、豪の大型車を軽で走り抜ける様なスリルと軽の馬力のなさからくるストレスで息切れの有様ではありましたが、それでも荒地を忽ち緑地にする研究の荒々しさと、少しの着想が広がりを見せる楽しさの一端を窺えて楽しいものでもありました。今は独創的で個性的な仕事をグループで、地方色があり乍ら国際的な、しかもお金のかかる仕事を誰よりも早く仕上げるという以前より張りも夢も楽しみも多い時代になったと思われます。今後は皆様の御活躍と、学生を含めて富山大学の一層の活性化を風の便りに聞かせて頂きたいと存じます。最後に、豊かな自然と心情に満ちた富山の地でゆったりと好きに過ごさせて頂けたことを深く感謝致します。また仕事を夜遅く迄共にした卒業生の諸君とその卒業後の活躍も楽しい思いの一つです。有難うございました。

定年退職にさいして

川瀬義之

昭和２４年１１月、創立間もなかった富山大学に赴任して以来丸４０年の歳月が矢の様に流れ去ってしまった。私が小学校に入学した昭和６年には満州事変が起り、中学に進んだ１２年には支那事変が勃発して本格的な日中戦争へと拡大して行った。中学では教練（軍事訓練）や体操が優先され、高校に入った年の１２月には遂に日米戦争に突入して、いよいよ世界の多くの国々を敵とす戦争となりました。我々理系の者は大学卒業迄入隊は延期される予定でしたが、文系の人は途中で入隊さらには戦地への出征も予想しなければならなくなりました。

１８年１０月には大阪大学に進みましたが、戦局は次第に悪くなり、正常な講義や実験は一年半程で終り、其後は各講座に配属となり講座単位で各地に疎開する事になりました。交通機関も困難な中を度々実験機器の運送を手伝い、度々移動しました。最終疎開先の富山県伏木の王子製紙（現、十條製紙）の工場内の陸軍六研（青酸を蒸留していた）で終戦を迎えました。我々は秋から３年生になっていたので、１１月頃から大学に登校しました。理学部は大阪中之島のビル街にあったので焼失は免れましたが、ガスは不通で水にも不自由をし、卒業実験は入門程度に終りましたが、各講座で一定しないため卒論提出も免除となり、２１年９月に卒業となりました。

卒業後大学に残る希望を持っていたのですが、最低１０年は無給を覚悟せねばならず、アルバイトも禁止されていましたので、不本意ながら尼崎の工場に就職しました。約２年半で会社を止めて大学に戻り研究生になっていました所、丁度其頃各地に新制大学が発足し、先輩の福井先生が赴任されていたこの富山大学で職を得る事が出来ました。

我々の文理学部は母体が高校だったので、実験設備等は殆ど未だ整備されておらず、最初の一年は奥田にあった薬学部内の一室に間借りさせて頂きました。蓮町の校舎に戻りいよいよ実験を始めましたが、設備や器具等の不備が多く大変苦労しました。更に我々は一般課程も受持っていたので、多い時期には週２回の学生実験もあり、また毎期の試験時期には監督が１０回以上も割当てられました。

２０年代、３０年代は全く冬の時代で、殆どの申請も文理学部なるがゆえに門前払いされ、一時期には２，３の専攻を残して後は一般課程だけになると言う話も流れました。その後も我々の有機化学分野では、薬学部から文献はじめ、元素分析、赤外、マス等多大の便宜を受けた事を感謝しております。朝鮮戦争が勃発して多少景気も上昇して来ましたが、卒業生の就職は教員志望者を除いては殆ど不可能で、度々会社訪問に出掛けました。高度成長が始まってからも大会社では指定校制を取っていたので種々苦労が多かった事を思い出します。３７年３月には未完成の五福校舎に移転しましたが、完成迄に３回程にわたって建築が行われ、それに応じて度々移転しました。

３８年秋からは約１ケ年間パリ大学付属ラジウム研内のキューリー研で共同研究をする機会を得て、毎日彼等と一緒に化学実験はじめ生活を共にする事が出来たので、彼等の生活、考え方、国際性等を実感する事が出来ました。そこには付属病院もありフランスでのガンセンター的機関になっていたので、医学への応用等についても関心を持ちましたが、言葉の問題もありもっと若い時期での海外生活が望ましいと感じました。

４２年には教養部が分離して、化学専攻には物理化学、構造化学、有機化学、天然物化学の４研究室が出来ましたが、４４年からは富大でも学園紛争が起こり数年間は多事多難な年月が続きました。やっと52年に改組が認められて人文学部と理学部になり翌年には理学修士課程も併設され後には分析化学研究室も増加して名実共に充実して来ました。

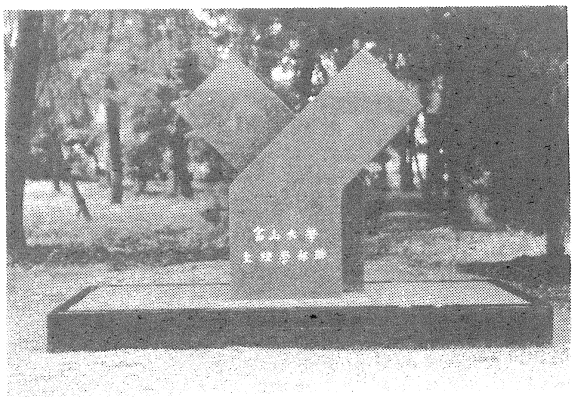
顧みますと学生時代は全く戦争に影響され、終戦後も敗戦の虚無感、食糧不足、貧困等で苦労しましたが漸く平和な恵まれた時代になりました。皆様の今後の御健康と御活躍を祈念してお別れの御挨拶を申し上げます。

◆理学部同窓会の現況（１９９０年５月１日現在）

○通常会員数	３３１９名
文理学部理学科卒業者	１７８０名
平成元年度理学部卒業者	１７６名
平成元年度大学院理学研究修了者（学部外出身者のみ）	４名

○準会員数（在学生）	９５７名
理　学　部	８９０名
大　学　院	６７名

富山大学創立４０周年を記念して昨年９月２３日に建てられた文理学部跡の石彫



◆理学部同窓会特別会員の異動

○停　年　退　職

Ｈ２．３．３１	川　瀬　義　之	天然物化学　教　授
Ｈ２．３．３１	横　山　　泰	有機化学　教　授

○採　用

Ｈ２．５．１	樋　口　弘　行	有機化学　助教授

◆平成２年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長	小　黒　千　足（理学部長）		
会　　長	平　田　卓　郎（１化）		
副　会　長	石　川　　克（１数）	高　桑　　昇（２生）	
常任理事	阿　部　幸　隆（２院数）	近　堂　和　郎（７物）	森　田　裕　之（１４化）
	岩　坪　美　兼（２６生）	笠　原　一　世（２７化）	

◆事　務　局　か　ら

１９８９年作成の会員名簿を購入させた方で、まだ名簿代金未払いの方は早急に納入して下さるよう、よろしくお願い申し上げます。

（　郵便振替番号　　金沢０－１６８２９　）

〒　９３０　　富山市五福３１９０　　富山大学理学部同窓会

発　行　　富山大学理学部同窓会　〒９３０　富山市五福３１９０
富　山　大　学　理　学　部　内
ＴＥＬ（０７６４）４１－１２７１内線２２９１